

十二の鷹たかとちようちんきちのすけや吉之助の話

作 川村優理



藤岡家所蔵「鷹の図屏風」六曲一双の内

作中歌とイラスト 川村明日香

「鷹の図びようぶ」と呼ばれる一対のびようぶは、六曲一双。六面のびようぶが二つで一組になっています。どちらも金色のびようぶで、六つの面に一羽ずつ、鷹の絵が描かれています。

二つの屏風を広げると、全部で十二羽の鷹がずらりと並ぶという造りです。

ちようちん屋の吉之助は、寺子屋なかまのまりちゃんの家の店先に広げられた「鷹の図びようぶ」の前で、

「うーん。」

と、首をかしげていました。

「どうも、よくわからねえな。」

「どうしてそんなにむずかしい顔してんのさ？」

まりちゃんが、ふしぎそうに尋ねました。

まりちゃんの家は、質屋の大坂屋です。鷹のびようぶは、質に持ち込まれたばかりのものでした。

寺子屋からいっしょに帰ってきた吉之助が、

「すげえ。本物みたいな鷹だ。」

と、買ってに上がり込んでしまったというわけです。

まりちゃんは、質屋の一人娘らしく、いっぱしの説明を加えました。

「その屏風は、なんとかって、道中記を書いた一九先生とこから来たもんだよ。絵描きはそれほど有名な人でないので、あんまり高い値段は付けられませんよ。って、番頭さんが言っていた。」

「あの十返舎一九先生が持ってたんなら、なにか、いわくもありそうだよな。」

吉之助は、一九先生の「東海道中膝栗毛」を、はじめのところだけ読んだことがありました。

「鷹は十二羽あるだろ。飛んでる鷹もあれば、木にとまってるのもある。上向いた鷹も、うつむいてる鷹もいる。白い鷹と黒い鷹、顔つきもばらばら。それに松の木や雪、滝、梅の花や萩の花、柳の枝が描かれてる。「これは、一ヶ月に一羽の鷹かもしれない。」

まりちゃんは、

「ふうん」

と、たいくつそうに言いました。

まりちゃんは鷹の絵がこわいので、じつと見たくはありません。

吉之助は、まりちゃんのことはおかまいなしで、話を続けました。

「一枚に一羽の鷹の絵が一月から十二月までを表しているとすれば、普通に一月から順に並べればいいようなもんだろうに、ばらばらなんだ。どうして順に鷹を並べなかったんだろうね」

「うん、ふしぎだね」

相づちをうちながら、まりちゃんは心の中で思いました。

「たぶん、適当に描いただけだと思うんだけどな。」

そんなとき、まりちゃんは、自分で作ったこんな歌を歌うことにしていました。

(まりちゃんが歌っていたって、吉之助には聞こえていないのです。)

吉之助は、まりちゃんの幼なじみです。小さいころからきつちりやさんなので、まりちゃんと遊んでいても、なにかに夢中になったら、まりちゃんをそっちのけにして、考えことを始めてしまうくせがありました。

ーちようちん屋さん

きつちいさん

われちようちんに、

まつすぐちようちん

赤ちようちんに

おそなえちようちん

びか、びか、びか、びか

ちようちん屋さんー

すると、…(はい)

どこかで小さい声がしました。

(いい歌でやす)

だけれが、そんなことを言ったような気がしました。

唐橋通りには、四百を超える店が並んでいます。

酒を造って売る店。油と肥料を売る店。みそとしょうゆの店。酔を売る店。小間物といつて、化粧の道具やくしなどを売る店。瀬戸物の店。古着の店。紙を売る店。はき物を売る店。豆腐やさん、魚やさん、米やさん、お菓子やさん、瓦屋さん。まりちゃんの家のような質屋さんは21軒。吉之助の家のようなちようちん屋さんは2軒。

川沿いの通りは、舟で通りかかる人や、山からいかだを流して木を運んでくる人。伊勢参りに行く人などで、いつもにぎやかでした。

吉之助は、お父さんの跡をついで、名人とよばれるようになちようちん職人になりたいと思っているのです。ほんの小さい頃からちようちん作りを手伝っています。

手先は器用な上に、きちょうめんで、まだ十なのに、ちようちん作りの腕前はなかなかのものだと言われていました。

「おっと、もうすぐ昼だ。店、手伝えって母ちゃんに怒られちまう。鷹の絵のことは、家に帰って、ゆつくり考えるとするよ」

吉之助は寺小屋用に持っていた筆と紙を出して、十二羽の鷹の絵をすばやく描き写しました。うまいものです。

それから紙を破って、一月から十二月の順に、絵を並べ替えて見せました。

「雪と鷹は一月の絵。梅と鷹は二月。柳の枝の鷹は三月。柏の葉っぱと鷹は四月。竹と飛んでる鷹は五月。雨を見上げてる鷹が六月。滝の前の鷹は七月。おてんとさまの光でまぶしそうな鷹は八月。ススキのところに飛んできたのが九月。池を見下ろし魚を狙ってるのが十月。松の枝に止まってる鷹が十一月で、枯れ枝に止まっているのが十二月の鷹。」

鷹を描いた紙を大切にまとめてふところに入れ、急いで帰っていききました

「まりちゃん、ありがとな。」

そのとき、まりちゃんは、ちようちんをさげた黄色い鳥に気が付きました。

形はひよこのようですが、大きさはにわとりくらいありそうです。ひよこはびよこりと頭を下げて言いました。

「おいらの歌、ありがとあす。おいらはちようちん屋に住むひよこの、きつちいと申しやす。」

あつけにとられているまりちゃんを置いて、黄色い鳥は、ちよこちよこ吉之助の後を追いかけて行きました。

その夜…。

まりちゃんが眠っていると、部屋に小さな灯りが入ってきました。

「こんばんは、まりさん。きつちいでやす。」

昼間見たひよこが、ちようちんをさげて立っています。

「鷹のびようぶを、おいらのちようちんで照らして見せてあげましょう。」

「びようぶなら、店の間に、出したままになってるけど。」

まりちゃんは、店の間に行ってみました。お店の人はみんな寝静まって、あたりは真っ暗です。

きつちいは、もっていた提灯の灯りを鷹の絵にかざしました。

ちようちんの灯りが反射して、金色のびようぶはまばゆいほどに輝いています。

きつちいは、ゆつくりちようちんを動かして、一羽ずつの鷹を照らしていききました。

どこからか、美しい音楽が聞こえてきました。まりちゃんが聞いたこともないような、美しい歌声です。

音楽に合わせて舞うように、鷹たちはびようぶの外に飛び出しました。

十二の鷹が、黄金の光の中で舞っています。

きつちいは、ゆらゆらとちようちんを動かし続けていました。

次の朝。

まりちゃんはいつものように目をさました。

お店では、おそうじが始まっているようです。まりちゃんも、前掛けをかけて、台所を手伝わなくてはいけません。

大急ぎで、店の間を通りぬけて、かまどのところへ行こうとして、まりちゃんは、鷹のびようぶの前を通りかかりましたが、

「あれ？順番が変ってる？」

鷹の絵は、吉之助が言った通りの一月から十二月の順にきちんと並んでいます。

そこへ、吉之助がやってきました。

「まりちゃん。十二の鷹は、琴の絃を表してるんじゃないだろうか。いや、琴なら十三絃だよな。やっぱり一筋足りねえか。」

一九先生も、店に入ってきました。

「いやはや。わしの東海道中膝栗毛が売れてね、金が入ったのさ。昨日質に入れたびょうぶを返してもらいにきたのじゃ。」

番頭さんがあわてて店に出てきました。

「それはそれは、おめでとうございます。」

そして、三人は、

「あ」

と、驚きました。

「鷹の順番が変わってる。」

一月から十二月に並び替えた鷹の絵の一番うしろに黄色い鳥がすまして座っていることに気がついたのは、まりちゃんだけでしょうか。」

「十三番目の鷹のつもりかな。」

まりちゃんがつぶやくと、きっちいは、だまっとうなずき、小さいちようちんを少しゆすって見せました。

(おしまい)

